

平成31年度学校教育教員養成課程

(推薦入試Ⅱ型)

小学校教育専修社会科教育コース
中学校教育専修社会科教育コース

小論文

表紙

[解答上の注意]

1. 試験開始後、表紙1枚、問題用紙1枚、解答用紙1枚、下書き用紙1枚があるか、確認しなさい。
もし、欠落のある場合には挙手して、そのむねを申し出なさい。
2. 解答用紙の受験番号欄に、受験番号を忘れずに記入しなさい。
3. 試験終了後、解答用紙を回収します。(全1枚)
表紙を含め、問題用紙、下書き用紙は各自持ち帰りなさい。(全3枚)

平成 31 年度学校教育教員養成課程

(推薦入試Ⅱ型)

小学校教育専修社会科教育コース
中学校教育専修社会科教育コース

小論文

問題用紙 全1枚

問題 次の文章を読んで、設問に答えなさい。

では教養が衰えてくると、どういう結果が生じるでしょうか。

テクノロジーは発達しますから、たとえば性能のいい自動車がつくられる。運転はだんだん簡単になってくるでしょう。しかし休みに自動車を運転してどこへ遊びに行こうかというときに、どこへ行くかを決めるのは誰のどういう仕事でしょうか。それは効率的な自動車をつくるテクノロジーからは出てきません。故障が起らないとか、いい空調装置があるとか、速いとか、そういうことはテクノロジーでできる。しかし、その自動車に乗ってどこへ行くかは、テクノロジーとは何の関係もない。

もし運転する人に目的の選択能力がないと、結局は観光旅行会社が決めることになるでしょう。観光旅行会社がつくった目的、プログラムに従って、性能のいい自動車を運転する。これは芭蕉の『奥の細道』と違う。どこに泊まって何を見るかは芭蕉が決めることで、旅行会社が決めたのではない。和辻哲郎という哲学者は、歩いたのではなくて汽車で旅行したのでしょうか、奈良、京都の古寺を回って仏像についてエッセイを書いています。有名な『古寺巡礼』という本です。もちろん、奈良、京都のどの寺を訪ねてどの仏像を見るか、つまり旅の目的は彼が決定したのです。彼には決定する能力があったわけです。その能力はどこからきたかというところ、テクノロジーではない。それは彼の教養からきているのです。

奈良、京都の仏像は、優れた彫刻で、芸術的に（あるいは造形的に）面白いものですね。私は、それを見ないで一生を暮らす人はお気の毒だと思います。そのくらい幸福を与えてくれる仏像です。しかし、それは観光会社ではなくて、自分にそれを選ぶ能力がなければ見られない。それを選ぶ能力は教養です。だから、二つの文化があると私は考えるのです。

一つはテクノロジーの文化であり、もう一つは、教養主義の文化です。テクノロジーはたとえば旅をするときの手段に関係している。自動車や飛行機や高速鉄道。教養は、どこへ行くか、何を見るのか、旅の目的は何かということで目的に関係している。

テクノロジーはものを作り出し、経済的繁栄をつくり出すことはできるけれども、それは手段であって、社会全体としてはどこへいくのか、いくべきかを、決めることはできない。もっとも劇的な選択は平和か戦争かということでしょうが、それもテクノロジーそのものからは出てこない。

『私の昭和史』(岩波新書)という本があって、私も編纂に関わったのですが、一人のエンジニアの方がこんなことを書いていました。彼は戦争中に戦闘機の設計に加わっていて、戦争がすむと新幹線の車両の設計に関わるのです。その思い出を書いている。軍用機は兵器ですから人を殺す道具です。新幹線はそうではない。目的は人の運送です。彼は非常に優秀な技術者であり、自然科学的な訓練を受けている。戦闘機の設計のときも新幹線の設計のときも同じように幸福だった。しかしそこにはその技術がどういう目的に役立つかということについての関心がまったくあらわれていない。私は二つの文化のたいへん象徴的な事例だと思います。

教養の再生はなぜ必要なのか。それは、社会にとっても、個人にとっても、究極の目的は何か、が大事だからです。どういう価値を優先するか、その根拠はなぜかということを考えるために必要なのが教養です。それがないと、目的のない、能率だけの社会になってしまうでしょう。

(加藤周一「教養とは何か」加藤周一、ノーマ・フィールド、徐京植『教養の再生のために一危機の時代の想像力』影書房、2005年所収より引用。表記を一部改変した。)

問1 筆者はテクノロジーの文化と教養主義の文化が、どのような関係にあると考えているか、説明しなさい。

問2 筆者のいうテクノロジーの文化と教養主義の文化との関係をふまえて、現代社会の諸事象のなかから一例をあげ、分析しなさい。